

編集後記

至らない点が多いですが、委員長という立場にて発刊に関わらせていただきました。今村常任理事や富士谷副会長、その他ご担当の先生方のご指導のもと、また多くの先生方にご協力いただき、無事に第54巻1号を発行できましたことを嬉しく思っております。今年5月には新型コロナウイルス感染症が5類感染症へと引き下げられ、様々な制限が緩和されました。引き続き感染症への警戒はしつつも、ICDの先生方をはじめ、いろいろな方との交流を促進していきたいと思っております。皆様、今後ともよろしく願います。(堀江 卓)

世界中を苦しめた新型コロナウイルスが、今年の5月8日から5類に変わり、少しずつマスクも外すようになって、日本もようやくコロナ前に戻りつつある状態です。しかし、戦争などの影響で、物価がドンドン上がり、医療機関の電気料金も昨年比較で電気使用量は変わらずも4割上昇となっているなどの報道もあります。一難去ってまた一難。しかし、この困難をどう捉えるかによって大きく変わってきます。解釈方法を3つに絞ると①困難を小さく捉える。②困難を大きくとらえているのは自分自身であることに気づくこと。③友人知人に相談する。ICDには素晴らしいフェローが沢山おられるので、毎年開催しているイベントにはどうぞ積極的に参加して、沢山の先生方から話を聞くと解決するヒントが隠されているかも知れませんね。皆さんはどう思われますか？最後に一刻も早く、『戦争』が終息することを心から祈っています。感謝を込めて…。(白壁浩之)

委員会に入れていただいていたのは6年です。この3月で定年となり、地元広島に帰り、地域歯科医療に従事し始めました。対面型が復活した委員会に参加できず残念な思いです。大学人としてだけでなく、地域歯科医療の現場も理解した上で、委員会活動に貢献できるよう頑張ります。21年間の単身赴任生活が終わり、やれやれです。(佐藤裕二)

2020年に新フェローになり広報編集委員を拝命致しました。ちょうどコロナ禍と重なり、自分の認証式、総会や年末集会にも参加できませんでしたが(大学の出張許可が下りなかったため)、コロナの感染者も減り、新型コロナウイルス感染症分類も2類から5類に引き下げられ、ようやく日常を取り戻せそうではっと安堵しているところです。広報・編集委員会も久しぶりで対面形式で開催することができ、鏡会長のご臨席も賜り、先輩方も楽しいひと時を過ごすことができました。今回の会議の議題は「雑誌第54巻1号」の編集会議でしたが、皆様全員がメ切りまでに原稿をご提出いただき、とてもスムーズに終えることができました。今後ともより良い紙面になりますよう微力ながら務めて参りたいと思います。(坂本輝雄)

本誌の作成にあたり、久しぶりに対面での委員会を開催しました。今までオンラインでしかお目にかかったことなかった(不思議な表現ですが)先生方と、直にお話をさせていただく中で、大先輩の先生方のお人柄に触れることができました。6月半ばにオランダで開催された国際小児歯科学会でも、ライブ配信を組み合わせながらの日中の充実したプログラムの後に、毎晩パーティーが催され、各国の先生方と親交を深めることができました。コロナ禍でデジタルコミュニケーションツールが著しく発達しましたが、温故知新・不易流行のどちらの精神も大切にしていきたいと感じました。(下村直史)

今回は広報委員会に入って2回目の編集会でした。いつも皆さんから学ぶことばかりですが、特にICDにおける雑誌出版についての意義と責任を感じました。また、今回はフェロー投稿も書かせて頂き、編集と投稿という2つの視点からいい経験をさせて頂きました。投稿では私の体験からライフワークとしている『咬合と自律神経』について書かせて頂きました。(武内久幸)

2021年に新フェローに入会させていただき、今村先生より、広報編集委員を拝命致しました。コロナ禍でもあり、昨年の委員会は全て、Zoomで行われ、何をしても良いのかよくわからず、画面を通して、諸先生方の熱い論議をただただ画面の前で一人で頷くだけでした。今年5月に、初めて対面での委員会に参加させていただき、その熱い思いを肌で感じる事が出来ました。査読といっても、誤字脱字を探すぐらいしかお役に立てませんが、これからも少しでもお役に立てればと思います。発刊にあたり、ご寄稿いただいた先生方、ご協力いただいた先生方には厚く御礼申し上げます。(酒向 誠)

広報編集委員として初めて本誌の査読に参加させていただきました。今回の54巻1号もたいへん盛沢山で充実しています。鏡会長の巻頭言から始まり、特別企画(歯科医療の節目を迎えて)6編、ICD国際前会長千田先生のご挨拶、受賞者(ICD特別賞とICDアワード)の報告6編、特別講演の内容2編、学会講演の解説2編、上條先生の特別寄稿を含め一般フェロー投稿原稿8編、そして事務的報告等で、実に多岐に亘ったジャンルの内容となっています。今まで専門学会主催の学会誌編集を携わった身にとって、一見統率のない様々な記述法、投稿様式、そして内容に些かの奇異を感じました。ただ読み返すごとに各フェローの生のお声が聞こえてくるようで、歯科学貢献のための熱い想いが伝わってきます。本学会の目的『公衆の健康と福祉のための歯科学の技術及び学術を国際的に促進すること』に正に適した第54巻1号となっています。お楽しみください。(柴原孝彦)